

青年期の不器用さの自己認知

— コミュニケーション・スキルおよび適応感との関連 —

林 由紀子・山崎 洋史・岩瀧 大樹・田島 祐奈

Cognition of clumsiness by adolescents and its relationship to communication skills and adaptation

Yukiko HAYASHI, Hirofumi YAMAZAKI, Daiju IWATAKI and Yuna TAJIMA

It has been reported that clumsy children have a deficit in learning and conducting daily life functions, despite the lack of physical or intellectual obstructions to motor functions. Deficits in the development of coordinated movements are known as the Developmental Coordination Disorder, which could be accompanied by social and emotional problems. Awkwardness might lead to difficulties in social situations, which might result in varying degrees of emotional problems. Certain studies on clumsiness conducted to date have targeted early childhood and childhood periods. Therefore, it would be meaningful to examine these problems in adolescence, which has been relatively neglected to date. We investigated relationships between the cognition of clumsiness and communication skills and adaptation in adolescence by conducting a questionnaire survey with university students (N = 216, 119 Men and 97 women). Results indicated that cognition of being clumsy suppressed communication skills and adaptation. Moreover, there were gender differences in these results, suggesting the increased effectiveness of providing gender specific support for clumsiness.

Key words : *clumsiness* (不器用さ), *adolescence* (青年期)

communication skill (コミュニケーション・スキル), *adaptation* (適応感)

I 問題と目的

身体的にも知能的にも正常範囲で明らかな運動機能の障害がないのにも関わらず、運動の協調を必要とする行為の獲得や遂行が暦年齢に比べて著しく低く、学習や日常生活の活動に著しい支障をきたす不器用な子どもの存在が学校や臨床場面でしばしば報告されている(是枝, 2005)。「協調」とは視知覚・固有覚・位置覚など感覚の入力から、出力である運動制御までの脳機能であり、その臨床例として、授業の体育においてはキャッチボールができない、縄跳びで手と足のタイミングが合わずにうまく跳べないといった粗大運動の問題や、板書の書き取りを必要とする授業や図工の授業において筆圧の調節がうまくできない、はさみを使って切るといった細かな動作が難しいといった

微細運動の問題があげられている(中井, 2014)。この発達の「協調」に関する問題はアメリカ精神医学会(American Psychiatric Association; 以下APA)(2014)が刊行している「DSM-5精神疾患の診断・統計マニュアル(Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders; 以下DSM-5)」における発達性協調運動障害(Developmental Coordination Disorder; 以下DCD)に相当する。DSM-5におけるDCDの診断基準は以下の通りである(APA, 2014)(Table 1)。DSM-5の以前のバージョン「精神疾患の診断・統計マニュアル第4版改訂版(DSM 4th edition Text Revision)」APA(2003)ではDCDのある子どもたちに社会的、情緒的問題が伴う可能性については明記されていなかったが、DSM-5では「集団での遊びやスポーツへの参加の減少、低い自尊心や自己肯定

Table 1 DSM-5におけるDCD診断基準

- | |
|--|
| <p>A. 協調運動技能の獲得や遂行が、その人の生活年齢や技能の学習および使用の機会に応じて期待されるものよりも明らかに劣っている。その困難さは、不器用（例：物を落とす、または物にぶつかる）、運動技能（例：物を掴む、はさみや刃物を使う、習字、自転車に乗る、スポーツに参加する）の遂行における遅さと不正確さによって明らかになる。</p> <p>B. 診断基準Aにおける運動技能の欠如は、生活年齢にふさわしい日常生活活動（例：自己管理、自己保全）を著明および持続的に妨げており、学業または学校での生産性、就労前および就労後の活動、余暇、および遊びに影響を与えている。</p> <p>C. この症状の始まりは発達段階早期である。</p> <p>D. この運動技能の欠如は、知的能力障害（知的発達症）や視力障害によってはうまく説明されず、運動に影響を与える精神疾患（例：脳性麻痺、筋ジストロフィー、変性疾患）によるものではない。</p> |
|--|

感、情緒的または行動的な問題、学業成績の低下、体力の低さ、および身体活動の減少」と明記された（APA, 2014）。DCDの社会的、情緒的問題が伴う可能性が示されたことから、身体的不器用さと社会的、情緒的問題の関連についての検討を行うことによって、上記の問題を抱えている人々への有機的な支援の方向性が得られると考えられる。

「不器用」とは、幅広い意味を含んでいるため、一概に不器用といっても文脈に応じて様々な意味合いに用いられている。運動面においては動き方が鈍い、ぎこちない、運動課題の遂行が未熟であるといった場合に使用されるが、他に認知面においては対人コミュニケーションの面において、要領が悪い、気が利かない、人づきあいが下手、などの意味で使用されることがある。杉山（2001）は不器用を、「精神遅滞や身体障害を伴わないにも関わらず、身体全体の協調運動や手指の巧緻性を有する運動の習得や遂行に際し、著しく困難を示すこと」と定義づけている。上記の先行研究の定義を尊重しつつ、本研究では、運動技能の面に注目し、不器用の定義を「精神遅滞や身体障害を伴わないにも関わらず、身体全体の協調運動や手指の巧緻性を有する運動の習得や遂行に困難を示すこと」とした。このような運動面に関する不器用さは障害の範疇にない人にも、程度の差はあれど、困難さをもたらすことが予想される。

このような不器用さが心理的、社会的な側面に及ぼす影響は、自分自身で自己をどのように認知しているかによって問題となりうるとも考えられる。自己の不器用さについて、自己をどう把握し

ているか自分自身で評価することは、不器用さの自己認知といえよう。自己認知について中村（2006）は、自己への姿の注目（自己意識・自己注目）と自己の姿の把握（自己概念）の過程を自己認知として捉えている。また、榎本ら（2008）は、自己の内面に注意が向くと、内省的思考が行われるようになり、そこに生じる情報処理過程を自己認知と捉えている。以上の先行研究で得られた知見をもとに、本研究では、不器用さに関する自己評価を「不器用さの自己認知」と呼ぶ。

不器用という言葉の用途を運動の領域に限定しても、手指を上手に動かすことができない、身体全体を動かす粗大運動に問題があるというように身体部位によって分けすることができる（杉山, 2001）。また、不器用さは年齢によって変化して現れてくる（APA, 2014）とあり、中学生までの不器用さと青年期の不器用さの関連を調査した林ら（2017）では、青年期になると不器用さのサブタイプが細かく分類されることが示された。

松原（2012）は、運動面の困難さは周囲に理解されにくく、本人にはかなりのストレスになっていることが多いことを指摘する。ここから運動面での困難さが日常生活全般へ影響するため、本人の自信喪失や自己効力感の低下の可能性がうかがえる。また、杉山（2001）は、動きの不器用さは、それ自体が問題であるというよりは、不器用さが子どもの心理面、社会的な側面に及ぼす影響のしかたによって問題となりうると述べている。林ら（2017）は、中学生までの不器用さの自己認知は青年期まで持続していると明らかにしており、青年期においても心理面、社会的な側面になんらか

の影響を及ぼしていることが考えられる。

先行研究より、不器用さと関連すること予想される社会的な側面として、コミュニケーション・スキルがあげられる。これは対人場面でコミュニケーションを円滑に行うために必要となるスキルであるが、コミュニケーション・スキルの定義はソーシャル・スキルと概念上の重複が見られるなど一意ではない。藤本・大坊(2007)はスキルという多義的な概念を扇形(ENDCOREモデル)に捉え、それは言語・非言語行動に関わるコミュニケーション・スキルを基盤として、社会性に関わるソーシャル・スキルが上位に位置するものである。本研究ではこのモデルを参考にコミュニケーション・スキルの定義を言語・非言語によるコミュニケーションを適切に行う能力とした。大坊(2006)はソーシャル・スキルの基盤となるコミュニケーション・スキルの重要性を指摘している。実際に近年、小・中学校でのいじめの問題だけでなく、高校や大学などにおいても友人ができず、集団や学校への不適応が社会的な問題となっている。そのような学校になじめないこと、友人と仲良くなれないことの原因の1つとしてコミュニケーション・スキルの不足があげられている(牧野, 2009)。ソーシャル・スキルやコミュニケーション・スキルはトレーニングによって獲得可能であることから明らかなように、先天的に獲得される能力ではないが、ほとんどの子どもはトレーニングをしなくても観察学習を行ったり、実際の集団場面で習得したりしていく。しかし、発達の面にアンバランスさがある子どもはソーシャル・スキルの習得に何らかの困難さを抱えている(岡田ら, 2012)。幼少期の不器用さは青年期まで持続することからも、青年期においてもコミュニケーション・スキルの習得に何らかの困難さがあるだろう。また、児童期に不器用であるがゆえに日常の遊びに参加できないことも示唆されており、身体的不器用さはコミュニケーション・スキルだけではなく、適応感にも関連していることが考えられる。

また、Nakai et al. (2011)では、日本の子どもたちの不器用さについて男女差の検討を行っている。そこでは協調運動の発達について男女差がみられ、微細運動は女性よりも男性のほうが苦手であることが示されている。APA (2014)によると

DCDの有病率は、女性よりも男性の方が高く、男女比は2:1~7:1の間であるとしており、不器用さとそれに伴うコミュニケーション・スキルおよび適応感には男女差があることが予想される。

DSM-5で新たに記述が加わった社会的・情緒的問題と不器用さに注目した研究はほとんどなく、検討の余地がある。青年期の不器用さ自己認知とコミュニケーション・スキルや適応感との関連、および影響について検討していくことで、不器用さを自己認知する学生に対し、どのような支援が可能となるか明確になるだろう。また、不器用さの特徴、サブタイプ、男女によってコミュニケーション・スキルや適応感への関連が異なることが予想され、個人の特性に焦点を当てたサポートの示唆を得る上で役立つことが考えられる。

本研究では、青年期の不器用さの自己認知とコミュニケーション・スキルおよび大学での適応感の関連を明らかにすること、男女差に注目し検討することを目的とする。

II 方法

1. 調査対象者

関東圏内の大学生292名に質問紙を配布し、回答を得られたもののうち、回答に不備がある調査対象者13名は分析から除き、216名を対象とした。

性別の内訳は男性119名、女性97名。平均年齢は、20.44歳($SD = 1.59$)であった。

2. 調査時期・手続き

2014年8月に講義後や著者の知人を介して調査を依頼し、許可が得られた個人に対して個別自記入式の質問紙調査を実施した。対象者に対して、質問紙への協力は任意であること、プライバシーが侵害されることはないことを口頭で説明、質問紙に明記し、倫理面に配慮した。

3. 質問紙内容

- (1) フェイスシート (性別・年齢)
- (2) コミュニケーション・スキル

コミュニケーション・スキルについて尋ねる項目である。多面的なコミュニケーション・スキルを体系的に把握することができる藤本・大坊

(2007) の ENDCOREs を使用した。この尺度は、「自分の感情をうまくコントロールする」など4項目からなる『自己統制』因子、「自分の考えを言葉でうまく表現する」など4項目からなる『表現力』因子、「相手の考えを発言から正しく読み取る」など4項目からなる『解読力』因子、「まわりとは関係なく自分の意見や立場を明らかにする」など4項目からなる『自己主張』因子、「相手の意見や立場を尊重する」など4項目からなる『他者受容』因子、「人間関係を良好な状態に維持するように心がける」など4項目からなる『関係調整』因子の6因子から構成されている。計24項目について、「かなり苦手」(1点)、「苦手」(2点)、「やや苦手」(3点)、「ふつう」(4点)、「やや得意」(5点)、「得意」(6点)、「かなり得意」(7点)の7件法で回答を求めた。得点が高いほどコミュニケーション・スキルが高いことを意味している。

(3) 大学生用適応感尺度

大学での適応感について尋ねる項目で大久保・青柳(2003)の大学生用適応感尺度を使用した。この尺度は、個人が環境と適合しているときの認知や感情を測定することのできるもので、特に大学環境での適応感を測定するために使用できるものである。「周囲に溶け込んでいる」など10項目からなる『居心地の良さの感覚』因子、「熱中できるものがある」など7項目からなる『課題・目的の存在』因子、他人から頼られていると感じる」など6項目からなる『被信頼・受容感』因子、「その状況で嫌われていると感じる」など6項目からなる『拒絶感の無さ』因子の4因子から構成されている。計29項目について、「全くあてはまらない」(1点)、「あまりあてはまらない」(2点)、「どちらともいえない」(3点)、「ややあてはまる」(4点)、「非常によくあてはまる」(5点)の5件法で回答を求めた。得点が高いほど大学で適応していると感じていることを意味している。

(4) 青年期の不器用さの自己認知に関する尺度

青年期の不器用さの自己認知について尋ねる項目である。林ら(2017)の現在の不器用さ自己認知尺度を使用した。調査を行ったのは2014年であるが、この尺度は青年や成人を対象とした

Kirby, Edwards, Sugden & Rosenblum (2010) の ADC (Adult Developmental Co-ordination Disorders/ Dyspraxia Checklist) や DSM-5 の 診断基準、Nakai, Miyachi, Okada, Tani, Nakajima, Onishi & Fujita (2011) の DCDQ 日本語版 (Japanese version of the Developmental Coordination Disorder Questionnaire) を参考に作成されたものである。青年期の不器用さ自己認知を測定することが可能な尺度であり、『粗大運動』因子、『微細運動』因子、『不注意』因子、『書字・多動性』因子の4つから成る。「全くあてはまらない」(1点)、「あまりあてはまらない」(2点)、「どちらともいえない」(3点)、「ややあてはまる」(4点)、「非常によくあてはまる」(5点)の5件法で回答を求めた。得点が高いほど不器用だと自己認知しているということの意味している。

III 結果

1. 因子構造の確認と信頼性の検討

(1) コミュニケーション・スキルの因子分析

ENDCOREsの24項目に対して、主因子法による因子分析を行った。因子の解釈可能性から6因子構造が妥当であると考えられた。6因子構造を仮定し、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量の小さかった3項目を除外し、残りの21項目に対して再度、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、先行研究とほぼ同様の6因子構造が確認された。それぞれの因子における α 係数は、.60~.85であり、やや値の低い因子もあるが、因子負荷量がいずれも.35以上であり、さらに研究を進める上で、必要な項目であるため、以降の分析で使用する事とした。

(2) 大学生用適応感尺度

大学生用適応感尺度の30項目に対して、主因子法による因子分析を行った。因子の解釈可能性から3因子構造が妥当であると考えられたため、3因子構造を仮定し、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量の小さかった3項目を除外し、残りの27項目に対して再度、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。先行研究では4因子であったが、本

研究では『課題・目的の存在』因子が抽出されなかった。この因子は「好きなことができる」「満足している」「退屈である」「自分のペースでいられる」等の項目で構成されており、これは大学での居心地のよさでもであると解釈できる。本研究ではそれらの項目に加え、先行研究での『居心地の良さの感覚』因子の項目である「周りの人と楽しい時間を共有している」「リラックスできる」「ありのままの自分を出せている」が同じ因子に抽出されたため、本研究ではこれらを『居心地の良さ』因子と命名した。その他2つの因子は、先行研究とほぼ同様の『拒絶感のなさ』因子、『被信頼感』因子であり、3因子構造が妥当であると判断した。それぞれの因子における α 係数に関しては、.78～.87の値が得られたため、十分な信頼性

が確保されていると判断した。

(3) 現在の不器用さ自己認知尺度

現在の不器用さ自己認知尺度の21項目に対して、主因子法による因子分析を行った。因子の解釈可能性から4因子構造が妥当であると考えられた。4因子構造を仮定し、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量の小さかった4項目を除外し、残りの17項目に対して再度、主因子法・Promax回転による因子分析を行った (Table 2)。 α 係数は、.60～.81であり、やや値の低い因子もあるが、因子負荷量がいずれも.35以上であり、さらに研究を進める上で、必要な項目であるため、以降の分析で使用することとした。

Table 2 現在の不器用さ自己認知尺度の因子分析結果 (主因子法・Promax回転)

項目内容	I	II	III	IV
I. 微細運動 (現在) ($\alpha = .722$)				
21. ナイフやフォークを使って、食事をするのが難しい	.719	-.065	-.138	-.023
10. 箸を使って食事をするのが難しい	.668	-.026	-.075	.132
17. スキップをするのが難しい	.644	.186	-.187	.019
14. 食事の際、食べこぼしが多い	.607	-.065	.267	-.195
11. ひげそり、もしくは化粧のような身支度に苦勞をする	.356	.061	.176	.039
II. 粗大運動 (現在) ($\alpha = .813$)				
16. ボールを正確に投げるのが難しい	.018	.871	.122	-.079
20. ボールを捕るのが難しい	.045	.806	.029	-.028
7. チームスポーツを避ける	-.060	.608	-.042	.190
III. 不注意 (現在) ($\alpha = .634$)				
3. 物にぶつかってつまづくことがある	-.016	-.013	.751	.104
2. 持ち物をなくすことがよくある	-.173	-.014	.655	.122
19. 電車に立って乗っている時にふらつきやすい	.045	.171	.475	-.117
5. 初めて行く場所で場所で道に迷う	-.048	.034	.395	-.122
IV. 書字・多動性 (現在) ($\alpha = .604$)				
12. 同年齢の人と同じくらい速く書くことができる (R)	.146	-.155	.145	-.591
13. そわそわせずに長時間座っていることができる (R)	.046	.036	-.011	-.500
8. 正確に黒板を書き写すことが難しい	.204	-.083	.204	.401
4. きれいに (他の人が読めるくらいの) 字を書くのが難しい	.231	.081	-.040	.387
9. 筆圧が強すぎる、あるいは弱すぎる	.149	-.043	.124	.367
因子間相関				
	I	-	.482	.458
	II		-	.373
	III			-
	IV			

注：(R) は逆転項目

2. 各下位尺度における男女差の検討

男性 ($n = 119$) と女性 ($n = 97$) に分類し、各下位尺度について t 検定を行った (Table 3)。

コミュニケーション・スキルに関して、「解読力」($t = -2.26, df = 214, p < .05$)、「表現力」($t = -2.65, df = 214, p < .01$) について、男性よりも女性のほうが有意に高い得点を示していた。このことから男性よりも女性のほうが相手の気持ちや感情を正しく読み取ることや感じ取ること、また自分の気持ちをうまく表現することに優れていると推測される。適応感については有意な男女差はみられなかった。不器用さ自己認知に関しては、「粗大運動」($t = -2.24, df = 214, p < .05$)、「不注意」($t = -3.16, df = 214, p < .01$) について女性のほうが男性よりも有意に高い得点を示していた。

一方で、「書字・多動性」($t = 3.02, df = 214, p < .01$) は男性のほうが女性よりも有意に高い得点を示していた。このことから女性のほうが全身を協調させた粗大運動の不器用さや日常での不注意さの自己認知が高いことが明らかになった。一方で手と目の協応動作を必要とする書字能力や字をきれいに書くこと、そわそわせずに長時間座っているという動作は男性のほうが苦手であると自己認知していることが推測される。

3. 不器用さの自己認知とコミュニケーション・スキルおよび適応感の相関

不器用さの自己認知とコミュニケーション・スキルおよび適応感の関連を把握するために、相関分析を実施した (Table 4)。

Table 3 各下位尺度の男女別における t 検定結果

		男性 ($n = 119$)			女性 ($n = 97$)		t 値
		M	SD		M	SD	
ENDCOREs	解読力	4.23	1.02	<	4.53	.90	-2.26*
	他者受容	4.84	.80		4.64	.79	1.89
	自己主張	3.91	.92		3.79	.83	1.07
	関係調整	4.39	.89		4.41	.89	-1.16
	表現力	4.00	.89	<	4.32	.92	-2.65**
	自己統制	4.41	1.28		4.24	.97	1.14
適応感	他者からの受容感	3.69	.60		3.76	.60	-.91
	居心地の良さ	3.56	.70		3.67	.66	-1.18
	被信頼感	3.19	.53		3.24	.53	-.69
現在 不器用さ	微細運動	1.65	.61		1.76	.62	-1.33
	粗大運動	2.16	1.04	<	2.48	1.1	-2.24*
	不注意	2.58	.81	<	2.94	.86	-3.16**
	書字・多動性	2.57	.74	>	2.27	.67	3.02**

注：男性 $n = 119$ 名 女性 $n = 97$ 名
** $p < .01$ * $p < .05$

Table 4 不器用さの自己認知とコミュニケーション・スキルおよび適応感の相関係数

		ENDCOREs						適応感		
		解読力	他者受容	自己主張	関係調整	表現力	自己統制	拒絶感の なさ	居心地の 良さ	被信頼感
現在の 不器用さ	微細運動	-.18**	-.22**	-.19**	-.06	-.09	-.03	-.32**	-.12	-.12
	粗大運動	-.25**	-.16*	-.23**	-.12	-.20**	-.11	-.26**	-.14*	-.20**
	不注意	-.21**	-.06	-.23**	-.10	-.10	-.12	-.14*	-.08	-.11
	書字・多動性	-.34**	-.24**	-.22**	-.13	-.15*	-.19**	-.28**	-.18**	-.18**

** $p < .01$ * $p < .05$

まず、コミュニケーション・スキルと不器用さの自己認知について述べる。「解読力」「自己主張」は、不器用さ自己認知のすべての因子に負の相関が見られた。「他者受容」は、「粗大運動」、「微細運動」、「書字・多動性」間に負の相関が見られた。「表現力」は、「粗大運動」、「書字・多動性」間に負の相関が見られた。「自己統制」は、「書字・多動性」に負の相関が見られた。

男女別での関連を検討するため、男女別で相関分析を実施した (Table 5)。「解読力」について、男性では「微細運動」、「粗大運動」、「不注意」、「書字・多動性」間に負の相関が見られた。女性では「微細運動」、「書字・多動性」間に負の相関が見られた。

「他者受容」について男性では、「微細運動」、「粗大運動」、「書字・多動性」間に負の相関、女性では、「微細運動」、「書字・多動性」間に負の相関が見られた。

「自己主張」について男性では、「粗大運動」、「不注意」、「書字・多動性」間に負の相関が見られた。女性では「微細運動」、「不注意」間に負の相関が見られた。

「関係調整」について男性では「粗大運動」、「不注意」間に負の相関が見られた。女性では、有意な相関は見られなかった。

「表現力」について、男性では、「微細運動」、「粗大運動」、「不注意」間に負の相関が見られた。女性では、有意な相関は見られなかった。

「自己統制」について男性では「粗大運動」、「不注意」間に負の相関が見られた。女性では有意な相関は見られなかった。

次に大学での適応感と不器用さの自己認知の関連について述べる。「拒絶感のなさ」は不器用さ自己認知のすべての因子間に負の相関が見られた。「居心地の良さ」は「粗大運動」、「書字・多動性」間に負の相関が見られた。「被信頼感」は「粗大運動」、「書字・多動性」間に負の相関が見られた。同様に男女別に述べる。

「他者からの受容感」について男性では「微細運動」、「粗大運動」、「不注意」、「書字・多動性」間に負の相関が、女性では「微細運動」、「粗大運動」、「書字・多動性」間に負の相関が見られた。

「居心地の良さ」について男性では、「不注意」、「書字・多動性」間に負の相関が見られた。

Table 5 男女別における不器用さの自己認知、コミュニケーション・スキル、適応感の相関係数

	ENDCOREs							適応感			現在の不器用さ			
	解読力	他者受容	自己主張	関係調整	表現力	自己統制	拒絶感のなさ	居心地の良さ	被信頼感	微細運動	粗大運動	不注意	書字・多動性	
END COREs	解読力	—	.43**	.41**	.47**	.52**	.14	.16	.18	.35**	-.19*	-.34**	-.32**	-.32**
	他者受容	.36**	—	.18	.35**	.33**	.17	.16	.18*	.24**	-.20*	-.20*	-.14	-.29**
	自己主張	.34**	.19	—	.28**	.52**	.22*	.23*	.14	.35**	-.12	-.26**	-.23*	-.30**
	関係調整	.29**	.27**	.24*	—	.38**	.16	.14	.25**	.36**	-.08	-.19*	-.23*	-.17
	表現力	.28**	.27**	.29**	.37**	—	.17	.33**	.31**	.46**	-.19*	-.43**	-.26**	-.12
適応感	自己統制	.13	.36**	.03	.23*	.33**	—	.05	.23*	.10	-.06	-.20*	-.21*	-.23*
	拒絶感のなさ	.18	.21*	.38**	.16	.25*	.06	—	.56**	.58**	-.34**	-.27**	-.28**	-.26**
	居心地の良さ	.06	.08	.22*	.01	.26**	-.03	.67**	—	.62**	-.12	-.16	-.19*	-.19*
	被信頼感	.37**	.16	.46**	.19	.25*	.04	.59**	.54**	—	-.07	-.13	-.15	-.18*
現在の不器用さ	微細運動	-.21*	-.22*	-.27**	-.04	-.01	.05	-.30**	-.12	-.20	—	.46**	.41**	.40**
	粗大運動	-.20	-.07	-.19	-.05	-.01	.04	-.28**	-.15	-.30**	.36**	—	.34**	.26**
	不注意	-.17	.09	-.22*	.05	-.01	.05	-.02	.01	-.09	.19	.29**	—	.40**
	書字・多動性	-.32**	-.26*	-.16	-.06	-.11	-.16	-.31**	-.14	-.16	.32**	.23*	.19	—

**p<.01
*p<.05

右上：男性
左下：女性

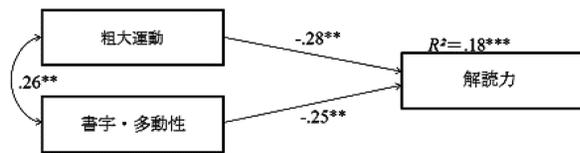
女性では有意な相関は見られなかった。

「被信頼感」について男性では「書字・多動性」間に負の相関が見られた。女性では「粗大運動」間に負の相関が見られた。

4. 不器用さ自己認知がコミュニケーション・スキルおよび適応感に及ぼす影響

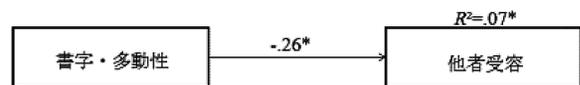
相関分析の結果において、ほぼすべての変数間に相関が認められたため、不器用さ自己認知がコミュニケーション・スキルおよび適応感に及ぼす影響を検討するため重回帰分析（ステップワイズ法）を行った（Figure 1-7）。変数間での相関に男女差が見られたため、男女別で分析を行った。

コミュニケーション・スキルの「読解力」について、男性では「粗大運動」と「書字・多動性」が負の有意なパスを示した（Figure 1）。「他者受容」について、女性では「書字・多動性」が負の有意なパスを示した（Figure 2）。「自己主張」について、男性では「書字・多動性」、「粗大運動」



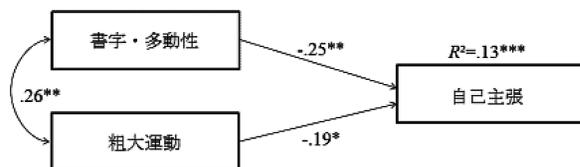
*** $p < .001$. ** $p < .01$
※有意なパスにみ記述してある

Figure 1 不器用さと読解力の因果関係（男性）



* $p < .05$
※有意なパスにみ記述してある

Figure 2 不器用さと他者受容の因果関係（女性）

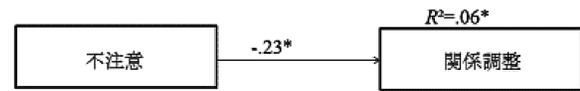


*** $p < .001$. ** $p < .01$. * $p < .05$
※有意なパスにみ記述してある

Figure 3 不器用さと自己主張の因果関係（男性）

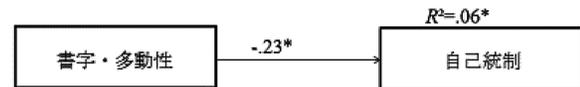
が負の有意なパスを示した（Figure 3）。「関係調整」について、男性では「不注意」から負の有意なパスがみられた（Figure 4）。「自己統制」について、男性では「書字・多動性」が負の有意なパスがみられた（Figure 5）。

適応感の「拒絶感のなさ」について、女性では「書字・多動性」が負の有意なパスを示した（Figure 6）。「被信頼感」について、男性では「書字・多動性」から、女性では「粗大運動」から負の有意なパスがみられた（Figure 7）。



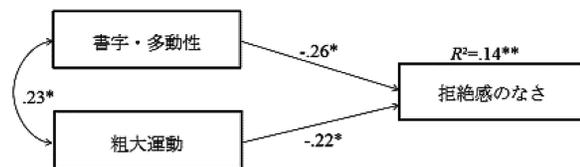
* $p < .05$
※有意なパスにみ記述してある

Figure 4 不器用さと関係調整の因果関係（男性）



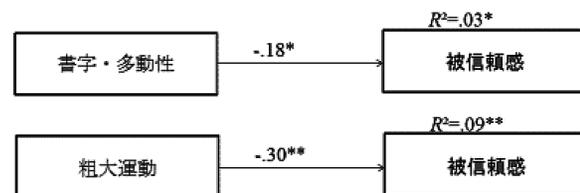
* $p < .05$
※有意なパスにみ記述してある

Figure 5 不器用さと自己統制の因果関係（男性）



*** $p < .001$. ** $p < .01$. * $p < .05$
※有意なパスにみ記述してある

Figure 6 不器用さと拒絶感のなさの因果関係（女性）



** $p < .01$. * $p < .05$
※有意なパスにみ記述してある

Figure 7 不器用さと被信頼感の因果関係
（上：男性 下：女性）

IV 考察

1. 不器用さの自己認知とコミュニケーション・スキルとの関連、男女差の検討

本研究では藤本・大坊(2007)のENDCOREsを使用した。このENDCOREモデルとは共通するコミュニケーション・スキルの因子を階層構造として統合したものであり、表現力と自己主張に共通するENCODE、解読力と他者受容に共通するDECODE、自己統制のCONTROL、関係調整のREGULATIONからなる。この階層構造をもとに考察を行う。また、不器用さの自己認知が女性よりも男性のほうがコミュニケーション・スキルと関連し、不器用さがコミュニケーション・スキルの低さに影響していることが明らかになった。

表現力と自己主張の表出系について、男性において粗大運動が不器用であるという自己認知が自己主張に影響を、表現力と関連があることが明らかになった。表現力に関しては、女性のほうが男性に比べ得点が高く、不器用さとの関連が見られないことから、女性は不器用さの自己認知に関係なく表現力を獲得していることが考えられる。表出系の自分の意見や立場を明らかにすることや自分の気持ちを言葉やしぐさでうまく表現することの一つに平木(2009)のいうアサーションがあるだろう。アサーティブではない自己表現は「攻撃的」または「非主張的」な自己表現と分類される。平木(2009)は非主張性の特徴として、自分の感情を表現できない、まわりくどい言い方をするなどの傾向をあげており、非主張性には「言えない」という行動に限らず、表現することへの不安や、表現することはできても相手にきちんと伝えることができないといった要素が含まれていると述べている。これは本研究のコミュニケーション・スキルとして扱った、自己主張や表現力にもあてはまり、表現することへの不安さやスキルの不足は、幼少期や幼少期から続く現在の不器用さによる自信の喪失が社会でのスキルにも影響を及ぼした可能性が考えられる。大学3・4年生を対象に自己アピールの苦手意識に対するアサーション・トレーニング効果を研究した久保山ら(2015)はトレーニングの前後でアサーションの行動面、心理面がアサーティブになったことが示されている。男女差が見られたことから、性別ごとのサ

ポートが有効となるだろう。そのため、男子大学生を中心とし、特に粗大運動や書字・多動性に苦手意識をもつ学生に対し、アサーション・トレーニングをすることは支援のひとつとなりうるのではないか。

解読力と他者受容の反応系について、男女共に自身が不器用であると自己認知することと相手の気持ちを正しく読み取ることや他者を受容するコミュニケーション・スキルの低さとの関連が明らかになった。また、男性においては「粗大運動」と「書字・多動性」が不器用であると自己認知することが解読力を抑制すること、女性においては「書字・多動性」が不器用であると自己認知することが他者受容を抑制することが明らかとなった。男性においては不器用さのサブタイプに関わらず、不器用だと自己認知することは他者を受容することや相手の気持ちを正しく読み取ることが難しい傾向があることが考えられる。上村(2007)は自己受容と他者受容のバランスがとれている者は自己と他者の相互調整を円滑に行うことができる一方で、自己受容と他者受容のバランスを欠いた者は自己と他者の相互調整を行うことが困難な状態であると述べている。このことから青年にとって適度な自己受容と他者受容を保つ状態は重要であるといえる。しかし、青年期に自己を不器用であると自己認知している場合、自己受容が低くなっていることが推測される。このことは自己と他者の受容のバランスが崩れ、他者受容が低くなると考えられる。女性においては「微細運動」と「書字・多動性」との間に関連がみられ、不器用さのタイプとしては、手先の器用さが関連している。そのため、手先の不器用さに対する運動の支援もひとつであるのではないかと考えられる。例えば、手先が不器用だと自己認知している人を対象とし、簡単な色ぬりや季節に合わせて手芸を行う等のプログラムを開くことがあげられる。手先の不器用さの自己認知が和らぐことで、自己受容ができていくことが期待できる。

「自己統制」について、男性においては「書字・多動性」からの影響がみられたが、女性においては関連がみられなかった。書字能力の低さや多動性の傾向が高いほど自分の衝動や欲求を抑えること、コントロールすることの困難さが強くなることが示された。字がきれいにかけるかどうか

や正確に速く書くことができるかどうかという書字能力は手指の自己コントロールとも言えるだろう。そして感情や衝動などのコントロールは獲得可能なコミュニケーション・スキルでもあるが、比較的神経生理学的領域に関わる特性であるものであり、統制という面で関連していることが考えられる。「書字・多動性」の不器用さは女性よりも男性の方が苦手であると自己認知しているため、女性では「自己統制」への関連がみられなかったのではないかと推測される。

「関係調整」について、男性においては不注意であると自己認知することが関係調整の苦手さに影響していることが示された。関係調整は集団内の人間関係およびコミュニケーションに働きかける能力であり(藤本・大坊, 2007)、物につまづきやすい、持ち物をなくすことがよくあるという周囲に対する不注意さは、周囲の人間関係全体に注意を向け、働きかけることへの難しさに関連していると考えられるため影響がみられたのではないかと推測される。「不注意」の因子には生活の自立に関わるものが含まれており、高橋(2012)は、「学生に自分の生活を自己管理するためのポイントを伝えることは、自立にも意味のある支援」であると述べている。日常生活、学校生活に必要な日程や物の管理をするスキル等を伝えることが有効である可能性が考えられる。

2. 不器用さの自己認知と適応感との関連、男女差の検討

「拒絶感のなさ」は男性においてすべての不器用の自己認知と負の相関が見られた。女性においては「書字・多動性」と「粗大運動」の不器用さが「拒絶感のなさ」の低さに影響を与えることが示された。不器用さの自己認知の低さが、男女ともに学校での拒絶感に影響を与えることが考えられる。青年期の不器用さの自己認知と中学生までの不器用さの自己認知が関連していることから(林ら, 2017)、幼少期に不器用さを自己認知していた場合、集団での遊びから排除されやすかったことが仮定され、拒否されていると感じたり、好かれていないと感じたりしてきた、もしくは現在も感じていることが推測される。

「居心地の良さ」は、男性では「不注意」、「書字・多動性」との間に負の相関が見られた。女性

において関連はみられなかった。青年の学校への適応感について調査した先行研究では居心地の良さの感覚は女性のほうが男性よりも得点が高かったことが明らかにされている(大久保, 2005)。これらのことから女性は不器用さの自己認知に関わらず、学校での居心地の良さを感じていることが考えられる。また、男性においても居心地の良さは不器用さとの関連が少なく、居心地の良さには自分のペースでいられることや、安心できること、リラックスできることが含まれており、不器用だと自己認知することに関わらず感じるができるためではないだろうか。このことから、他者と比較されることのない環境や自分のペースを維持できる環境はすごしやすい環境であると考えられる。

「被信頼感」について、男性においては「書字・多動性」の不器用さが、女性においては「粗大運動」の不器用さが「被信頼感」の低さに影響を与えることが示された。書字能力における不器用さは学業成績にも影響することが想定される(APA, 2014)。そのため、男性においては書字能力の不器用さが他人から良い評価がされている、頼られていると感じることに影響を与えたのではないかと考えられる。女性においても書字能力の不器用さが学業成績に影響していると想像できるが、「被信頼感」との関連はみられなかった。女性においては粗大運動に他者からの期待を感じていることが考えられ、そのため自分が他者から期待されていると感じる気持ちが低くなる傾向と関連していることが推測される。

不器用さの自己認知が適応感と関連、影響していることが明らかになった。適応感についての先行研究では「友人との関係」が適応感のいずれの側面に対して強い影響があることが示唆されている(大久保, 2005)。本研究では、適応感を個人一環境の適合性の視点から調査したが、拒絶感のなさや被信頼感に友人との関係で感じるものであると想定される。そのため、友人との関係で不器用さにおける劣等感を感じたり、不器用であるがゆえにうまくコミュニケーションがとれないことが不器用さと適応感が関連づいたと考えられる。不器用さのサブタイプに応じ、苦手であると自己認知している人を対象に、運動プログラムを開くこと、日常に必要なスキルをお便りとして相談室や

支援室から発行し伝えること、またそれらのプログラムを行うことで支援となりうるのではないか。

V まとめ

本研究の結果から、不器用さの自己認知がコミュニケーション・スキル、および大学での適応感と関連があること、不器用さの自己認知がコミュニケーション・スキルや適応感を抑制していることが明らかとなった。不器用であると自己認知していることは、社会的に重要な技能を遂行することが難しいことであると考えられ、そのことによって自信をなくし、遊びやスポーツに参加することを妨げるという悪循環を招くことが推測される。青年期の日常生活には協調運動が影響しているように見える場面が少ないが、不器用さは年齢によって変化して現れてくる (APA, 2014)。そのため、青年期における不器用さもコミュニケーション・スキルや適応感に関連や影響を与えることが本研究からも明らかとなった。

また、不器用さの自己認知やコミュニケーション・スキルおよび適応感への関連では性差がみられた。このことから性別ごとに必要な支援が異なることが示唆された。本研究では不器用さの自己認知について尋ねたが、不器用さを正確に認知し、不器用であると感じる領域が本人にとって重要であれば、不適応であると感じるだろう。女性のほうが不器用さに関する自己認知の得点が高いにも関わらず、コミュニケーション・スキルや適応感が高いのは、不器用さはさほど重要ではないと認知している、つまり器用さを必要としない活動に重点をおいているため、このような結果になったことが推測される。この不器用さの自己認知の問題に対処するための1つの方法として、不器用さがコミュニケーションや、ある場に適應するためにさほど重要ではないと自己認知することが有効であると考えられる。これは認知的なアプローチである。具体的には大学では高校などの環境に比べ自由度が高くなり、サークル活動や自分の得意なことを活かせる場が増えていく。身体活動を伴わない他の活動、得意とする活動でこれらを補っていくことが可能となるだろう。

これまで不器用さに関する研究の多くは幼児期

や児童期が対象とされてきた。本研究では青年期を対象とし、不器用さとコミュニケーション・スキルや適応感との関連について検討する上では有意義であったと考えられる。しかし、不器用さの自己認知とコミュニケーション・スキルおよび適応感との間に負の相関がみられたのにも関わらず、パスがみられなかったことから今後、モデルの改良を行い検討する必要があるだろう。

また、大学生や青年期を対象にするならば不器用さを補う要因にどんなものがあるのか自由記述などで探索的に検討することも意義があるのではないか。

引用文献

- American Psychiatric Association., 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸 (訳) (2003). DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引 新訂版 医学書院
- American Psychiatric Association., 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸 (監訳) 神庭重信・尾崎紀夫・三村將・村井俊哉 (訳) 日本精神神経学会 (編) (2014). DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引 医学書院
- 大坊郁夫 (2006). コミュニケーション・スキルの重要性 日本労働研究雑誌, 546, 13-22.
- 榎本博明・岡田 努・下斗米淳 (2008). 自己心理学 金子書房
- 林由紀子・岩瀧大樹・山崎洋史 (2017). 青年期版不器用さの自己認知尺度作成の試み—運動経験と過去・現在の自己認知の検討— 群馬大学教育実践研究, 34, 217-226. (平成26年度昭和女子大学大学院生活機構研究科修士論文の一部である)
- 藤本 学・大坊郁夫 (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸要因の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究, 15, 347-361.
- 平木典子 (2009). 改訂版 アサーション・トレーニング—さわやかな〈自己表現〉のために—日本・精神技術研究所
- 上村有平 (2007). 青年期後期における自己受容と他者受容の関連 個人志向性・社会指向性を指標として 発達心理学研究, 18, 132-138.

- Kirby, A. Edwards, L. Sugden, D. Rosenblum, S. (2010). The development and standardization of the Adult Developmental Co-ordination Disorders/Dyspraxia Checklist (ADC) *Research in Developmental Disabilities*, 31, 131-139.
- 是枝喜代治 (2005). 不器用な子どものアセスメントと教育的支援 発達障害研, 27, 37-45.
- 久保山明梨・吉岡和子 (2015). 自己アピールの苦手意識に対するアサーション・トレーニングの効果—「自分のこだわり」を語るワークを取り入れて— 福岡県立大学心理臨床研究, 7, 21-30.
- 牧野幸志 (2009). 中学生を対象としたコミュニケーション・スキル訓練の開発(1) —中学生のコミュニケーション・スキル、精神的健康の性差、学年差の検討— 経営情報研究, 17 (1), 1-16.
- 松原 豊 (2012). 知的障害児における発達性協調運動障害の研究—運動発達チェックリストを用いたアセスメント— こども教育宝仙大学紀要, 3, 45-54.
- 中井昭夫 (2014). 発達性協調運動障害 (Developmental Coordination Disorder: DCD) 辻井正次 (監) 発達障害児支援とアセスメントのガイドライン 金子書房, pp.290-296.
- Nakai, A., Miyachi, T., Okada, R., Tani, I., Nakajima, S., Onishi, M., Fujita, M., (2011). Evaluation of Japanese version of the Developmental Coordination Disorder Questionnaire as a screening tool for clumsiness of Japanese children. *Research in Developmental Disabilities*, 32, 1615-1622.
- 中村陽吉 (2006). 新心理学的社会心理学：社会心理学の100年 ブレーン出版
- 岡田 智・森村美和子・中村敏秀 (2012). 特別支援教育をサポートする図解よくわかるソーシャルスキルトレーニング (SST) 事例集 ナツメ社
- 大久保智生・青柳 肇 (2003). 大学生用適応感尺度の作成の試み—個人—環境の適合性の視点から, 12 (1), 38-39.
- 大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 杉山登志郎 (2001). 運動発達における問題 辻井正次・宮原資英 (編). 子どもの不器用さ—その影響と発達の援助— ブレーン出版, Pp.58-65.
- 高橋知音 (2012). 発達障害のある大学生のキャンパスライフサポートブッカー大学・本人・家族にできること 学研教育出版

はやし ゆきこ (清瀬市教育相談センター)

やまざき ひろふみ (昭和女子大学大学院)

いわたき だいじゅ (群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター)

たじま ゆうな (昭和女子大学心理学科)